歩いて発見。津の魅力

135 歴史散歩

市指定有形民俗文化財 三船常夜灯

伊賀街道は、津の市街地から長野峠を越えて上野(伊賀市)に至る、全長約50㎞の街道です。途中、美里町五百野で、伊勢街道の月本の追分(松阪市)を起点とする奈良街道と合流します。津藩政下においては、津城と伊賀上野城を結ぶ道であるとともに、伊勢参宮の人々が多く利用する道でもありました。

こういった街道沿いには、多くの常夜灯が建てられました。常夜灯というのは、夜道などの安全を確保するために一晩中火をともしておく灯火のことで、特に伊勢神宮の参詣者のために建てられたものを参宮常夜灯といいます。今回紹介する市指定有形民俗文化財の三船常夜灯もその一つです。

三船常夜灯

三船常夜灯は、もともと伊賀街道沿い、現在の国道163号の平木口バス停の近くにあった三舟神社の前に建てられていました。しかし、三舟神社が明治41(1908)年に長野神社に合祀された後、道路拡幅などにより常夜灯は、街道の北方に位置する平木集落の天王社の石段のそばに移築されました。春日型と呼ばれる常夜灯で、竿には「太神宮」、「道中安全」、「常夜灯」、「弘化三(1846)年午歳二月吉日」と刻され、基壇には三段にわたり世話人、寄進者名がびっしりと記されています。世話人の中には平木村中、長野宿旅籠屋中、馬借方、人足方など地元の人々や、津、伊賀、遠くは江戸、大阪の人々の名前も記されています。

現在、国道163号は、平成20年に新長野トンネルが開通し、その後も徐々に改良工事が行われるなど、昔と変わらず津と上野を結ぶ重要なルートの一つです。常夜灯を訪れて、当時の様子に思いをはせてはいかがでしょうか。

基壇に記された世話人、寄進者名